

令和4年度夏休み前全校集会校長講話

「平和」を望むなら何をすべきか

長野県蘇南高等学校長 小川幸司

1 はじめに

新学期、部活動のインターハイ予選・本大会、蘇峡祭など、目まぐるしく駆け抜けた日々が今日で一区切りとなります。

コロナ禍が続いているにもかかわらず、蘇峡祭を一般公開しながら全日程を予定どおり開催した生徒会執行部と全校の皆さんに、心からの拍手を贈ります。また、特に3年生の皆さんが運動系・文化系それぞれの部活動をやりとげるなかで、「成長した自分」の姿をしっかりと掴んでくれたことをとても喜ばしく思っています。バドミントン部の皆さんは、7月26日に四国の徳島県で行われたインターハイに出場しました。全国の舞台に立った皆さんを、リスペクトします。

最初に3点の連絡をします。

①今年も南木曾町、同窓会、産業教育振興会からたくさんの支援をいただいています。南木曾町からは、蘇南アカデミーの運営・ロイロノートやスタディサプリの費用補助・カナダ語学研修や下宿代の補助をいただいています。同窓会からは部活動遠征のマイクロバスの費用補助を、そして産業教育振興会からは、ものづくり系列のセンター研修のマイクロバス・学校の設備の充実・3年生の「総合探究」の研究費などをいただいています。コロナ禍に加えてウクライナ戦争の影響で物価高・円安になってしまい、経営がとても苦しいなか、地域の方々から蘇南高校は変わらぬバックアップを受けているということを知ってください。

②3年生は就職・進学のために前期の中間段階での通知表を渡します。今年度から10段階評価に加えて、3観点評価（知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力）をABCの3段階で付けています。単に知識を覚えているかどうかだけではなく、唯一の正解のない問いをしっかりと考えているかとか、試行錯誤しながら学びに取り組んでいるかとか、皆さんの様々な頑張りを丁寧に評価するためのものです。

③全国ニュースで教員の様々なコンプライアンス違反が報道されています。本校ではそうしたことのないよう、教職員全員で思いを揃えています。しかし万一、皆さんから見て問題だと思ふことがあれば、私でも他の先生でもいいので、相談に来てください。また、以前にプリントで示したように県教育委員会の相談窓口もあります。

では、本題に入りましょう。

2 ウクライナ戦争を多面的に分析する

今年の蘇峡祭では3年ぶりに「地域物産店」の販売を行いました。生徒会の皆さんが頑張ってくれて、入荷した地域の銘品をすべて売り切ることが出来ました。生徒会では、仕入れ値に50円から10円程度の価格を上乗せして販売し、その利益をウクライナ戦争の難民支援に送金する計画をたてました。結果的に出た利益は、21,388円にのびりました。

今日は、改めてウクライナ戦争と「平和」について考えたいと思います。

2022年2月24日にロシアのプーチン大統領が隣国のウクライナに対して攻め込み、兵士だけでなく多くの民間人を無差別に殺害してきました。プーチン大統領の主張は、①ウクライナがアメリカ・西ヨーロッパ側の軍事同盟であるNATOに加盟しようとしており、それがロシアの安全を脅かしているということと、②ウクライナ国内のロシア人人口が多い地域（ドネツクやルガンスク）の独立を支援する、というものでした。軍事力に勝るロシア軍は短期間でウクライナ全域を占領してゼレンスキー政権を転覆させるつもりでしたが、欧米各国の支援を受けたウクライナの粘り強い反撃を受け、戦争はすでに半年も続いています。日本のマスメディアは、最初の3カ月くらいは連日ウクライナのことを報道していましたが、次第に情報を伝える量が減ってきています。それは視聴者が飽きてきて視聴率がこの話題では獲得できなくなっている面もあり、戦争が落ち着いてきているからではありません。

この戦争は、ウクライナがかつてはロシアの一部だったという歴史を口実にして、プーチン大統領が、独立国ウクライナに一方的に侵略したものです。だから欧米諸国や日本は、ウクライナを支援しているわけです。ところが世界の動きを見ると、そう考えない人々もたくさんいるということに気づかされます。

第一に、ロシア国内のプーチン大統領を支持する人の割合は6月末の段階でなんと80%に及んでいます。第二に、3月に国際連合総会がロシアを非難する決議を行ったとき、これに反対したのは5カ国（ロシア・北朝鮮・ベラルーシ・シリア・エリトリア）だけだったのですが、賛成ではなく「棄権」というもうひとつの立場をとった国がなんと35カ国にも及んでいました。中国・インド・南アフリカ・イラク・イランをはじめとする、多くのアフリカ・アジア・ラテンアメリカの国々です。

ロシア国内で厳しい言論統制がしかれていることやロシアとの経済的なつながりを各国が失いたくないと考えていることが大きいことは言うまでもありません。しかしそれだけでなく、次の3点のことを見逃してはいけないと思います。

①独立国を軍事的に占領しようとする企ては、アメリカも行ってきたことなのではないか（たとえばベトナム戦争・イラク戦争）という疑問を世界の国々はもっています。ロシアを非難するならば、なぜアメリカも非難しないのかという疑問です。②最近15年間くらいのウクライナでは、ロシアに対抗する愛国心を強調するために、第二次世界大戦末期にソ連（ロシアの前身）の支配に武力抵抗した指導者バンデーラを英雄として讃えてきましたが、ロシア側から見るとバンデーラが当初ナチス・ドイツの支援を受けていたことから、ウクライナの動きはヒトラーを支持する動きに見えたという面がありました。バンデーラ自身は、のちにナチス・ドイツに対しても戦い、ドイツにつかまって強制収容所に入れられた経験をもっています。ただし、ウクライナ国内の反ロシアの政治団体のなかには、ナチスの鉤十字に似たシンボルを掲げる者たちもいて、ウクライナ国内に住んでいるロシア系住民にはとてもおそろしいことと受け止められていました。③半年近く生きるか死ぬかの限界状況に置かれているウクライナの兵士たちが心身ともに疲労困憊しているということが報道されるようになってきました。

こうしたことを考えると、一方的に攻め込まれたウクライナの人々の独立を守る戦いを応援しつつも、世界が必ずしも「正義 VS 悪」に単純化されているのでないことや、ウクライナの兵士のことも視野に入れて、なるべく早期の停戦をどう実現するかを模索するべきであると思われます。最終解決としての講和ではなく、さしあたってこれ以上の攻撃をしないという仮の約束としての停戦です。

かつて1950年代に北朝鮮が一方的に韓国に攻め込んで朝鮮戦争が起こったことがありました。韓国側には北朝鮮を占領するまで戦うべきだという意見がありました。こ

れ以上同じ民族同士で殺し合うべきではないと双方が考えて板門店で停戦がむすばれました。100 万人以上が戦死した朝鮮戦争の停戦について、あのときああすべきではなかったと考える人は、今ではほとんどいません。

3 ウクライナ戦争の「平和」とは何か

ここで私たちが正反対のものとして考えている「戦争」と「平和」の関係について考えてみましょう。実は、「平和」の反対は、「戦争」ではないのです。「平和」の反対にあるのは「暴力」です。しかもその「暴力」には、①戦争や弾圧・拷問のような「直接的暴力」と、②人々を貧困や不平等の状態においやる「構造的暴力」があります。皆さんが「健康で文化的な最低限度の生活」をおくれないようなことになれば、それは「構造的暴力」にさらされており、「平和」ではないのです。

ウクライナに視点を移しましょう。今、こうしているときにもウクライナに住む家や働く場所を奪われて、必死の思いで隣国ポーランドに避難してきた人々が大勢います。彼ら／彼女らは、ポーランド国境を越えた時に「戦争」から解放されたのでしょうか。そうではないですよね。さしあたってポーランドに一時避難する場所が必要になるでしょう。そして日々の生活物資を得なければなりません。さらには心身の大きな傷を治療しなければならないでしょう。そして新しい生活をどこの国でどうやっておくっていくかを考えて踏み出さなければなりません。その新しい生活が、たくさんの苦勞の果てに軌道に乗って初めて、「暴力」から解放されて「平和」になれるのです。

そうだとすると、ウクライナを支援するということは、武器をウクライナに渡すということだけでなく、避難してきた膨大な人々に寄り添って、彼らの新しい人生を支えていく民間人の温かな思いやりに満ちた活動が大切になってくることがわかるでしょう。私たち日本人に今問われているのは、ニュースで見る戦場の様子だけでなく、こうした地道な救援活動を行っている民間人の様子を知り、彼ら／彼女らを応援していくことではないでしょうか。

実は、ポーランドの首都ワルシャワにある日本人学校の教頭先生をしている坂本龍太郎さんという方が、この間ずっとウクライナ避難民を必死に支えてきました。そして避難しないでウクライナ国内にとどまっている人々にも生活物資を渡し、さらには子どもたちに教育のための物資を渡す活動を、坂本さんは展開しておられます。

坂本さんは長野県千曲市の出身で、私は友人（稲荷山養護学校の竹下先生）を介して坂本さんと知り合い、応援してきました。避難民の生活物資を購入するお金を日本から贈るというクラウドファンディングには、目標 100 万円に対して 3,799,000 円が集まりました。今回の蘇峽祭の売り上げは、クラウドファンディングの後になりましたが、坂本さんにお贈りしました。

坂本さんはとても忙しい日々を過ごしておられるのですが、特別に蘇南高校の皆さんにビデオメッセージをいただきました。そのメッセージを一緒に聴きましょう。

皆さん、こんにちは。小川校長先生、生徒の皆さん、現在、ポーランドでウクライナ避難民の支援を続けています坂本と申します。

皆さんはこれで終業式、夏休みを迎えるのですが、このことはウクライナやポーラ

ンドでは「普通」のことではないということ。皆さんが終業式を迎えられるのはとても幸せであるということ。このことを知っていただきたいと思います。

こちらでウクライナ支援をされていて、初めはみんな一週間、二週間、一カ月もすれば終わると思っていました。でももう4カ月も経ってしまった。日本では他の出来事などがたくさんあり、今のウクライナの情勢がなかなか伝わりにくくなっています。でも状況は良くなっているわけではなく、むしろ悪くなっているんです。

(中略)

今皆さんが学んでいることは、皆さんのためだけのものではありません。世界の人々をつなぐため、助けるために学んでいるのです。特に言語は、日本と世界をつなげるために学んでいるのです。その学びを続けてこそ、将来の日本と世界を、皆さんが背負って立つのです。

だから今回のウクライナ戦争についても他人ごととせずに関心を持ち続けてほしい。そして今でなくてもいいから、将来、ウクライナのために何ができるか、そして日本の平和のために何ができるかを、学びながら考えてほしい。

以上が皆さんへの私からのメッセージです。終業式を自分の国で自分の言葉で迎えられる。それがいかに平和なことなのか、幸せなことなのか。学べることがいかに幸せなことなのかを、もう一度ここで考えてください。

4 平和を望むなら…

今日の話をもとめます。

第一に、世界の対立は複雑であり、今回のウクライナ戦争は一方的な侵略なのだけでも、対立の構図は単純な「正義 VS 悪」ではないということを考えました。だからこそ「停戦」をどう実現するかが大切なのです。目の前にある問題を、いつも多面的に見ていきましょう。

第二に、「戦争」の反対にあるものは「暴力」であり、暴力には「直接的暴力」だけでなく、「構造的暴力」があることを見ました。ゆえにウクライナの人々を本当に応援するためには、人々の生活を支える坂本龍太郎さんのような民間人の活動がとても大切になります。今回、私たちは坂本さんのお手伝いをすることができました。

「平和を望むなら、戦いに備えよ」(Si vis pacem, para bellum)とは、4世紀頃、古代ローマ帝国の軍事学者ウエゲティウスの有名な言葉です。今回のウクライナ戦争をきっかけに、世界中で軍備拡大が進もうとしています。今日の講義では、次のことを考えたのでした。

平和を望むなら、物事をつねに多面的に考えよ。

平和を望むなら、平和を創る主人公になって、人々を支えよ。

夏休み明け、また、私たちが人々の幸せをどう支えていくかについて、一緒に考えていきましょう。

【参考文献】

木戸衛一編『平和研究入門』（大阪大学出版会、2014年）

黒川祐次『物語ウクライナの歴史』（中央公論新社《新書》、2002年）

塩川伸明「ウクライナ侵攻の歴史文脈と政治倫理」（『世界』2022年5月号）